私の生き方 社会科教員への道のり（第一回）

小林　朗

8月23日(火)、「新潟日報」の窓欄に、早すぎた先輩の死を悔やむ私の投稿が掲載された。

この文を読んで、「小林さんらしい」という方々もいたが、「なぜ個人的なことを書いたのか」を質問される人もいたのである。

この短い投書に私の社会科教員への道の原点があった。

1　歴史学の衝撃

私は小学校低学年時代は学力不振児だった。運動神経もあまりよくなく、何をやってもダメだという子どもといえた。しかし、小学3年生のときに私は第一の衝撃がおきた。そのときにはわからなかったが、学級担任が社会科を専門にしている小菅信先生で、社会科の授業がとても面白かった。「私の町」の学習で三条の一ノ木戸商店街の朝始発のバスに誰が乗るかという課題が出された。クラスメイトは2、3日でやめてしまったが、私はどういうわけか1か月間調べた。それを知った学級担任はほめてくれ、学級で私に発表させた。内容は覚えていないが、これをきっかけに私は社会科が大好きになった。

そのうちに歴史の本を読むようになってゆく。小6年のときに、親から小学校版の歴史上の人物を書いたシリーズを買ってもらい、読みふける。自然と歴史が好きになっていった。　中学校は漠然と、歴史を勉強するのが楽しいと思っていた。高校に入学すると、社

会科がいくつかの科目に分かれ、世界史と日本史の歴史の授業があった。特に、日本史に傾斜していった。私は二人の日本史の先生に習った。いまでは信じられないと思うが、新採用から退職まで三条高校に勤務された早川昇先生であった。大学時代、東条英機暗殺軍団に加わった方だった。歴史の深いところまで教えてもらい、影響を受けた。もう一人は教科書に載っていない細部まで教える橋本桂一先生であった。関ヶ原の戦いを3時間、実況中継をされた。「西郷隆盛の家の隣の家は誰の家ですか」と質問される先生であった。また、政治経済の藤井泰一先生は生徒に授業で討論させた。社会科だけでなく、他の教科の先生方も知的興味をひく先生方が多かった。国語で学級担任だった大橋鉄也先生には卒業後もお宅に行き、多くのことを相談していた。

中高校時代は、司馬遼太郎『竜馬がゆく』『峠』『国盗り物語』『燃えよ剣』『花神』『空海の風景』などを貪り読み、NHKの大河ドラマを楽しみにみていた。この時代は、英雄の歴史を追っかけていたのである。

私の家は三条ではよくある金物商で父は後を継いでもらいたかったらしいが、大学は自然と文学部の歴史学科を志望した。父には歴史を趣味にして商売をすると言って説得した。足利尊氏を勉強しようと思い、京都の大学を受験したが合格できなかった。両親は浪人を許してくれなかったので、二次試験が当時あった駒澤大学文学部歴史学科に入学した。大学に入って、1年生は教養教科だけで歴史学入門という講義しかなかった。この頃、歴史学の3・4年のゼミ（考古学、日本史の時代別、東洋史など）が学生だけの自主ゼミもつくり、4年間、自分の専攻する歴史学の時代を勉強できた。中世史は鎌倉時代と戦国時代の自主ゼミだったので、足利尊氏を学ぶことができないと思ってしまった。自主ゼミの紹介を聞いていて、明治大正昭和戦前を調べる近代史研究会に興味をもち、入会することにした。週1回、自主ゼミはあった。院生から1年生までがテーマを決めて、チューターがレジメをつくり報告して議論し合った。1冊の本を指定して購読することもあった。

1年のとき、研究会で自由民権運動の学習のため色川大吉『明治精神史』を読んだことは忘れられない。夏休みはテーマに関する地域で合宿を行い、春は4年生を送る追い出し合宿が開かれた。4年間という短い

時間だったが、濃厚なときを会員と過ごした。同じ志をもっていても人間関係で苦しんだりしたこともあった。卒業後、会の中で夫婦になられている方々もいた。

ここで勉強するうちに、私の第二の衝撃があった。英雄ではなく、民衆の歴史を学習していたのである。女工、鉱夫、小作人などに視点をおいて学んでいた。近代史研究会の学びとともに、大学の先生が大学紛争を契機に駒澤へ来られた方が多く、影響を受けた。特に、戦国時代、江戸時代、幕末維新時代、明治時代の4人の大学教官がとても興味ある講義をされた。戦国時代の杉山博先生は北条・今川・武田氏の研究家であった。ガダルカナル島の生き残りで、戦争の反省から戦争が多かった戦国時代をテーマにされた。「信長・秀吉が威張っても米を食べなくては生きられない」と言われていた。秀吉が針を売って主人を探していることを講義された。中世は針を売る人は差別される人であった。秀吉はそこから天下人になるのである。宣教師フロイスの残した文書で講義をされた。杉山先生に「新潟はなぜ上中下越という地域区分なのか」と私は聞かれたことを覚えている。京都に近い方から上越となっていたのである(1)。江戸時代の所理喜夫先生の長篠の戦いの講義は忘れることができない。地方文書（地方の史料）を調べる必要性を説かれた。幕末維新の吉田常吉先生は井伊直弼研究家であったが、アメリカ大使ハリスの世話をした唐人お吉と明治天皇の父、孝明天皇の毒殺説の講義は面白かった。明治時代の外交史の研究家であった山口一之先生は私の指導教官だった。公武合体運動で和宮が将軍家茂のところへ降嫁するとき、安全性から東海道を使わず、中山道を利用した。各宿の助郷役を幕府は命じたために名主層や民衆に負担が重く、支持を失って崩壊することになると講義された。歴史的事実は多角的にみてゆく必要があるとわかり、私は歴史学の楽しさに胸が踊った。

近代史研究会は4年生は卒業論文と就職活動があるため、活動は3年生までが運営した。1年生のときは自由民権運動、2年生は女工と産業革命、私が主体になった3年のときは足尾銅山鉱毒事件をテーマにした。それぞれグループに分かれて調査をした。足尾鉱毒事件では農民班、労働班、社会主義班の3班で行った。私は農民班に所属した。足尾銅山鉱毒事件のリーダーであった田中正造を巡る農民たちや知識人を調べていった。田中正造研究の二つの潮流があったので、林竹二

と由井正臣の2冊の本(2)をいつも手元においていた。田中がなぜ民主主義を学んだかで、前者は幕末からの名主公選制から学んだという観点であり、後者は自由民権運動の体験からだという観点であった。私は自由民権運動の秩父事件の手法を学び(3)、耕地（村単位）オルグ（オルガナイザーで組織者）とあざ字（数か村合同）オルグで蜂起が起きたことを生かして、足尾銅山鉱毒事件では耕地オルグはいたが、字オルグがいなかったと研究会誌に結論づけた。丁度、この年に、大学の歴史学部全体の講演会に田中正造研究の第一人者、由井正臣先生が来られ、話す機会があった。「足尾銅山鉱毒事件の警察調書を丹念に読んでみるのがいいです」と私の説に批判をされた。民衆史は民衆側の史料が少ないので、権力の史料から読み解くことを学んだ。

研究会の夏合宿のフィールドワークは私に大きな影響を与えた。私が1年生で入会すると、自由民権運動をテーマにしていた。上記の「新潟日報」の記事の先輩に邂逅した。夏休み合宿がその年に激化事件のあった秩父に決まっていた。その下見ということで先輩が私と同級生と2人を連れて秩父へ行ったのである。この第三の衝撃を私は忘れることはできない。秩父の桑畑が続く風景と、村を耕地と呼ぶことを知った。先輩は「恐れながら天朝様に敵対するから加勢しろ」と言った大野苗吉の風布耕地まで先輩は私たちを連れていってくれた。弾圧して殉死した警察や軍人の碑はあったが、自由民権運動家の碑はなかった。まさに、「歴史学は史料だけでなく実際に現地へ行って調べる大切さを実感」できた。この体験は私には大きなことだった。

3年のとき、足尾町（現日光市）の足尾鉱山、煙害で消滅した松木村、正造の出身地の佐野、遊水池になった谷中村などをフィールドワークした。日本初の公害事件を農民運動からみる視点を貫いた。1年のときの秩父が手本になっていた。

私が歴史学習で地域教材を発掘するようになったのは、この先輩の秩父でのフィールドワークが発端だといってよいだろう。最終的に、私は卒業論文に三条の中小地主の動向を書くことにした。中央史観ではなく、地域の歴史はイコール、民衆の歴史であった。

先輩は生涯、自由民権運動の研究家としてすすまれることになった。最初の赴任校の黒埼高校で、山際七司文書に出会って調査と分析を一生の仕事とされた。縁あって、同会の女性と結婚され、東京から新潟へ来

て高校教師をされた、退職後は、新潟県立文書館で山際文書を整理されていた途中であった。この9月に先輩の2冊目の著作が世に出版される。私は歴史学を学び、中学校教師になって歴史教育へすすむことになったが、先輩は歴史学研究に邁進されたのである。

大学での自主ゼミの参加は私を主体的に歴史学を学び窓を開けてくれた。学生で歴史学研究会の学会や自分が興味をもつ講演会に参加してゆく。本多公栄が事務局長をして歴史教育者協議会の学習会に参加もしていた。

歴史学を主体的に学ぶ中で、私は大学の自治についても考えるようになってゆく。どの学生組織にも属さない「輪をつなぐ会」を発足して、大学授業料や施設などについて改善するためシンポジウムなどを企画した。他学部の学生との交流ができた。これをきっかけに、経済学部で中国史の上原一慶先生、日本農村史の森武麿先生の講義も受けた。特に、日本経済史（日本産業革命）の古庄正先生からは多くの影響を受けた。所沢にあった古庄先生のご自宅まで訪問した。

以上、私の歴史学への道を小中高校、大学の学びのあゆみとして述べた。「新潟日報」の記事は個人的なようであるが、自分が歴史学を学習してゆくきっかけの一つを書いた。個人史は全体史へつながってゆくのである。学問への開花にはさまざまなパターンがあるが、私の個人体験も一つの例である。「新潟日報」の記事は私の歴史学への扉を開く契機といえた。

そして、学校時代、多くの恩師、先輩、同級生に巡り会って刺激を受けた。学問そのものの研究は人とのネットワークに支えられていたのである。

参考文献

(1)杉山　博『戦国時代』（中公文庫）
(2)林　竹二『田中正造の生涯』（講談社現代新書）
(3)由井正臣『田中正造』（岩波新書）
(4)井上幸治『秩父事件』（中公新書）

（こばやし　あきら・新潟市）